

発行
北海道ポーランド文化協会

〒060-0018
札幌市中央区北 18 条
西 15 丁目 3-19 安藤方
電話・FAX 011-556-8834
hokkaidopolandca@gmail.com

POLE

第 92 号 2017.9.1
北海道ポーランド文化協会 会誌

北海道ポーランド文化協会
東京事務所

〒107-0052
東京都港区赤坂9-6-29-309
音響計画(株) 霜田気付
電話 03-6804-1058
FAX 03-6804-6058



第 31 回定例総会 & 創立 30 周年祝賀会 にお越し下さい!

会場：ニューオオタニイン札幌（北 2 西 1、電話：011-222-1111）

日時：2017 年 10 月 21 日（土）

11:00～総会、12:00～14:00 祝賀会



本協会は、1987 年 10 月に設立され、音楽、文学、映画、演劇、歴史、科学技術などの文化交流を通じて、日本とポーランドの絆を強める活動を続けて参りました。

30 年の節目の今年、その活動のあゆみを振り返るとともに、ポーランドと日本の音楽パフォーマンスを組み込んだ賑やかで楽しい祝賀会を計画しています。

会員のみならず、お友達・ご関係者をお誘い合わせてご参加ください。

- ✓ 参加資格は、特にありません。会員、旧会員、ポーランド人、ポ文協に関心のある方々、どなたでもご参加ください。
- ✓ 会費：会員・一般 5,000 円、学生 2,500 円
非会員のポーランド人とその家族は 1,000 円（中学生以下の子供は無料）
- ✓ 祝賀会の流れ：会長・来賓挨拶、乾杯、ピアノ演奏、祝宴（ポーランドと日本の音楽パフォーマンス）
- ✓ お問い合わせは左上の住所/Tel・FAX/e-mail(安藤あて)にお願いします。
- ✓ 参加申し込みは、同封の返信用ハガキでお早めに（最終：10 月 14 日（土）までに）お願いします。

※ 音楽パフォーマンスについて：日本の音楽として「午後のポエジア」に続きアイヌ民族の口琴の演奏を行います。口琴は日本では平安時代の金属口琴が出土しており、江戸時代にも流行しましたが、本州では途絶えました。北海道では、北方経由で金属口琴と竹口琴ムックリがアイヌ民族に伝わり、現在に至っています。

解説と演奏は、第一人者の阿部和厚(かずひろ)北大名誉教授にお願いします。



（左）ポーランドの皆さんによる国歌「ドンプロフスキのマズルカ」斉唱
（記念誌出版祝賀会、2015.10.17）

（右）ムックリ演奏：川上恵
（午後のポエジア 7、2017.5.27）



《第 80 回例会》午後のパエジア 7, 2017.5.27

《詩劇》ピウスツキに参加して

菅原 みえ子

十年程前のこと、霜田千代磨さんからご案内をいただき、江別のドラマシアターでもIVでポーランド留学生による詩の朗読を観せていただいた。

そして三年前には、詩を朗読してみないかと誘われ《午後のパエジア》で自作詩を朗読させていただいた。皆さんとても温かく受け入れて下さり感激。

有難いことに、昨年に続き今年もお声を掛けていただいた。ポーランドは私には遠い国で、アンジェイ・ワイダ監督の作品を数本、詩人ヴィスワヴァ・シンボルスカの詩に触れたり、そのくらいの関わりしかなかったが、今年は「没後 100 年記念《詩劇》ピウスツキ～ポーランド・サハリン 愛と死～」という大きなタイトルのもと、多数の出演者で一つの詩劇を創り上げて行くという。浅い知識と認識しか持たず、非会員の私などが関わって良いものかとチラリと思ったが、そこは図々しくお引き受けした。

打合せと同時に俄勉強もスタートした。ピウスツキが愛した樺太アイヌ女性の存在、その女性との子孫が現在国内に沢山おられること、サハリンは三年前訪れ栄浜に立ったが、そこが亡き伯母の地であったことを後に知り、知識のみのサハリンが今ひたひたと迫り満ちつつあること、今回の舞台の一つが栄浜であったこと…等を知り私の心は躍った。

当日の会場は十年ぶりに、江別市のドラマシアターでもIVである。空模様怪しく遂に大雨。私達の不安をよそに早くからお客様が押し寄せて下さった。会場は早くも熱気に包まれている。

ここ江別は樺太アイヌの方々の暗い歴史の地、

対雁(ついでしかり)である。偶々この地でピウスツキの詩劇を「言挙げ」する意味は大きい。まさに「場の力」を想った。そしてアイヌ民族の方々にご出演いただけたいことは何より嬉しい。ご家族や可愛い赤ちゃんも客席で応援していただいたことも大きな喜びであった。

詩劇は尾形芳秀さん原作の骨太で壮大なドラマで、出演者ひとり一人が個人の持てる力をフルに発揮した結果、一つのハーモニーを醸し出した…と思うのは手前味噌だろうか。

ピアノ、サクソ、ポーランド国歌、詩の競演、朗読、墨象「愛」のパフォーマンスとバラエティ豊かに繰り広げられた。なかでも圧巻は詩人長屋のり子さんの自作詩「盲いたシンキンチョウの絶唱」の朗読。この大作を僅か 40 分程で完成させたとか。正に神業である。この時のり子さんはエンチュウ(樺太アイヌ)の「愛に生きたひとりの女」そのものであった。

お終いはアイヌの奏者によるムックリとトンコリ演奏。永遠に浸っていたい心地よいリズム。魂を奪われるとはこのことか。舞台と客席合わせて 80 名の人々は一つになりこの時みな輝いていた。

私はようやく会に入れていただこうと心が定まった。樺太を経由し、知らずに訪れていたリトアニアのヴィリニユス(ピウスツキと、ワイダ監督遺作の主人公の画家が住んだ土地)も経由して、今こそ独りゆっくり丁寧にポーランドへ歩を進めようと思っている。

(すがわら・みえこ)



(左)橋本隆行, 福本昌志, 園部真幸, 坂田朋優, 熊谷敬子, 菅原みえ子, Michał Mazur, Sylwia Olejarz, 小林暁子, 長屋のり子, 霜田千代磨



(上) 国歌・ドブロフスキのマズルカ:
(左端) Radosław Strzałka



(下・左) トンコリ:
福本昌志, 橋本隆行
(下・右) ムックリ:
結城志穂

〈詩劇〉ピウスツキへの補遺

尾形 芳秀



来年は「ブロニスワフ・ピウスツキ没後 100 年」にあたることを記念して、霜田千代麿氏の発案で〈詩劇〉が企画されました。この上演には大勢のみなさまにご参加いただき、原作者(構成者)としては望外の喜びでした。ただ、いくつかご質問をいただきましたので、以下に補足させていただきます。

1. 構成年代

本作では、ピウスツキが流刑になった 1887 年から、弟ユゼフの使者により妻へ死の知らせがあった 1934 年までを描いている。

2. 当時のサハリン島への流刑ルート

- ①シベリア経由サハリン島へ: チェハンスキらは 1885 年にこのルートでサハリン島へ流刑。
- ②ウクライナのオデッサ港からスエズ運河回りの義勇艦船でウラジオストク経由コルサコフへ: ピウスツキは 1887 年にこのルートで流刑。帰路はウラジオストク→日本→米国→ポーランド(ガリツィア)と辿った(1906)。

3. ピウスツキの妻の名前

昨今はアイヌ民族の妻の名前は「チュフサンマ」とされているが、今回は時代のロマンを感じてもらうため、敢えて「シンキンチョウ」を採用した。一つにはこの構成年代ではこの名前で呼ばれており、1934 年に樺太を訪れた弟ユゼフの使者ポウチンスキも紀行文でこの名前を使っていることによる。

4. ピウスツキと他のポーランド人流刑囚の関係

ピウスツキは流刑地でアイヌ民族を研究した人類学者として評価されているが、彼は何故サハリン島南部の街や同邦人の住む人里から離れた土地で研究や教育を行ったのであろうか? 私は、ピウスツキの意図はコルサコフ管区の監視の目を逸らすことではなかったかとみている。それは彼には母国の独立支援という大きな目的があったからであろう。

彼の住むアイ集落はコルサコフから直線で約 100km も離れている。研究や報告でコルサコ管区と連絡を取るためには、この 100km の汚泥の道を歩かなければならなかった。到底一日で踏破できる道ではなかった。コルサコフを一步出ると開拓囚の集落が僅かに点在するだけで、その上監獄を嫌って開拓を志願しても、その苦難に耐えきれず野盗化する者も相次いでいた。チェハンスキ率いるワルシャワ村(ノヴォ・アレクサンドロフスク)までは約 50km ある。この地からコルサコフ管区まで支給物

資を受け取りにいった帰り道、野盗化した賊に襲われ二人が犠牲となっていた。

このような環境からピウスツキを守ったのは同胞たちだった。彼らの支援があつてこそ、ピウスツキの真の目的が達せられたのであろう。彼らは母国内戦を闘う弟ユゼフのことを知っていた。写真も持っていたが、これらの写真は誰から入手したものであろうか。これらの行為はコルサコフ管区には極秘裏に進められていたことが窺えるのである。

引用・参考文献

- 1) チェハンスキから妻への手紙、妻から夫フランツへの手紙: 露囚物語～流刑囚フランツ・チェハンスキー、寒川光太郎著、沖積舎、1981.10、新装覆刻
- 2) プーシキン「シベリアへ」:(1)露囚物語、(2)シベリアの鉱山の奥底でも～プーシキンの詩による4つのモノローグ、曲 ショスタコーヴィチ Op.91-3、詩 プーシキン、藤井宏行訳、2006.3.11
- 3) チェーホフ「シベリアの旅」: チェーホフ全集 12、松本裕訳、ちくま文庫、1994
- 4) アポリネール「ミラボー橋」堀口大学訳、Guillaume Apollinaire - Most Mirabeau, tr. by Adam Wazyk <https://milosc.info/guillaume-apollinaire/most-mirabeau/>
- 5) ポーランドのアイヌ研究者ピウスツキの仕事、井上絨一編集責任、北海道ポーランド文化協会ほか、2013.10.20(「年譜」「樺太のポーランド人たち」など)

<http://hdl.handle.net/2115/53543>

* 日本とポーランドの国交樹立と樺太

- 1918 年 11 月、ポーランド共和国成立
- 1919 年 3 月、日本とポーランド共和国が国交を樹立
- 1920 年 4 月、ポーランド共和国駐日臨時代理公使にユゼフ・タルゴフスキを任命、8 月東京着任
- 1921 年 5 月、在ポーランド初代日本公使川上俊彦着任
- 1925 年 8 月、スタニスワフ・パテック(Stanislaw Jan Patek, 1866-1944, 1919-20 外務大臣, 1921-26 初代駐日公使)が樺太のポーランド人を訪問し母国のパスポートを発給(樺太日日新聞)

詩劇・ピウスツキ(動画)

<https://www.youtube.com/channel/UCMj79F42yAXTgXRyYgXLDiw>

ブロニスワフ・ピウスツキ資料を求めて

沢田 和彦

2015年3月に筆者はポーランドのクラクフとザコパネを訪問し、クラクフではポーランド芸術アカデミー・科学アカデミー(PAU i PAN)学術図書館、ポーランド科学アカデミー・芸術アカデミー(PAN i PAU)学術文書館、クラクフ国立文書館、ヤギエヴォ図書館でブロニスワフ・ピウスツキ関係の資料を調査・収集した。

学術図書館の特殊コレクション中に大量のピウスツキ関係資料が保管されている。ピウスツキ資料は全部で23の整理番号(シグナトゥラ)から成っており、そのうち彼が1892～96年にサハリンで撮影・収集したアルバム中の写真190葉は芸術アカデミー(PAUart)のHPで見ることができる¹⁾。

PAN i PAU 学術文書館には、ピウスツキ関係資料は全部で20整理番号あった。書簡類が中心で、特にピウスツキ宛とマリア・ジャルノフスカ宛の書簡が大量にあった。マリアはピウスツキの幼なじみの人妻で、彼が1906年10月にクラクフに到着した後に一時期同棲した女性である。ここで発見した写真を1葉紹介する=写真(1)=。写真の下方には被写体各人の姓名がロシア語で記されている。裏面にはポーランド語で「子供たちとの交流、サハリン、1901-1904」と記入されている。後列中央がピウスツキである。



(1)

クラクフ国立文書館にはピウスツキ関係資料はわずかしかなかったが、彼がサハリンと日本で入手した、日本人、ポーランド人、中国人、アメリカ人の写真14葉と絵葉書3枚は、筆者にとって貴重な発見となった。そのうち2葉=写真(2)、(3)=を紹介する。これらは他の写真とともにクラクフ国立文書館のHPで公開されている²⁾。



(2)



(3)

これらは被写体と光の量が違うので異なる日時に撮影したのだろうが、部屋は同じである。写真(2)の左背後に薬缶、写真(3)の右背後には目覚し時計という生活用品が写っている。またいずれの写真でも和室に椅子が置いてあることからして、これは「箱館屋」の2階の可能性が高い。もしそうだとすれば、これらはきわめて貴重な写真である。

ピウスツキは1905(明治38)年12月に来日し、翌年1月中旬から7月初旬まで東京市京橋区尾張町2丁目9番地の「箱館屋」という、富士の看板を掲げた商店の2階に滞在した。「箱館屋」の主人は信大蔵(しんたいぞう)という人物。もと尾張藩江戸詰の武士で、榎本武揚に従って五稜郭の戦いに参加し、銃弾を6発受けて江戸へ護送されてきた敗残兵の前歴を持つ。その後プロテスタント信者となり、1874年に銀座に来て、榎本の援助のもとに函館の天然氷や牛乳を買い、宮内省御用として知られ、後にはアイスクリームや洋酒類も置いて、スタンドバーの元祖として銀座の名物のひとつとなった。与謝野鉄幹に「箱館屋」という1907年の長詩がある。この店はウラジオストク方面のロシア人と取引があり、旧幕臣や1884年に日本に亡命した朝鮮の亡命政治家金玉均、外国の水兵などがたむろしていたという。写真(2)、(3)に写っている日本人男女

は、現時点では特定できない。

広大な建物を誇るヤギエヴォ図書館は、現在は大学附属図書館となっている。ヤギエヴォ大学は1364年に創立された名門大学で、古くはコペルニクスから、近年はローマ教皇ヨハネ・パウロ二世、作家スタニスワフ・レム、ノーベル賞詩人ヴィスワヴァ・シンボルスカなどが輩出した。本図書館にはピウスツキのポーランド語書簡 49 通とピウスツキ宛のポーランド語書簡 2 通が所蔵されている。

週末はクラクフの図書館と文書館が閉館になるので、南の山岳リゾート地ザコパネへ一泊で出かけた。ザコパネはピウスツキがその後クラクフから移り住み、マリア・ジャルノフスカと一緒に暮らしたゆかりの地である。当地のトラ博物館もピウスツキと関わりが深く、彼宛の書簡を所蔵している。

2015 年秋には筆者はワルシャワの近現代文書館を訪問した。ここにもピウスツキ関係文書が全部で 134 整理番号あり、内訳は書簡 116、メモ 2、写真 14、名刺 1、絵葉書 1 である。またピウスツキ関係文書とは別に、「パリ・ポーランド国民委員会」文書と「ボレスワフ・シュチェシニャク・コレクション」にもピウスツキに関わる貴重な資料が含まれていた。

ボレスワフ・シュチェシニャク(1908-96)はポーランドの日本研究者で、1937~42年にポーランド外務省条約局契約職員として東京のポーランド大使館に勤務した。その間、1939~42年に留学生として早稲田大学で古代日本の研究に従事し、1939年5月から1942年3月まで立教大学で本邦初の正式な講座でポーランド語とポーランド文学を教えた。第二次大戦後アメリカに渡り、インディアナ州にあるノートルダム大学の教授となった³⁾。

シュチェシニャクは来日に際して本国政府から指令を受けていたのだろう、当時まだ存命の世界中のピウスツキ関係者に照会状を送り、それに対する回答文書が「シュチェシニャク・コレクション」に残っている。そのなかに筆者は、ピウスツキとアイヌ女性チュフサンマの間に生まれた長男木村助造のシュチェシニャク宛封筒と日本語書簡(1939年10月18日付)を発見したので、全文紹介する。

「拝復 御手紙下さいまして誠に有り難う御座います 日本に来られて親善関係に努力されて居られる事を衷心敬意を表します 私の父は波蘭の御國の人であった事は承知してありますが私が三四歳の幼時でありましたので何事も知って居りません 随って妹キヨさんも母の胎内中であって何等父の生存中の事などわかる筈がないのです。一番善く知って居た木村愛助と言ふ人が今生きて居れば五十歳以上になりますが あとの人は別段に

わからないのです 甚だ残念ですがあなたの本を書く上に何か参考になる事をお知らせする事が出来ないのでお気の毒です 只私の母のジユウサンマは昭和十二年一月十八日に死去してあります。あなたの御手紙にはシンキンチョウと書いてありますが違ひます 尚寫眞は今撮ったもので差上げる様なものはありませんので後日送り上げます 最後に貴方の御健康とお國の再興をお祈りして止みません 昭和十四年十月十八日 樺太白濱 木村助蔵 ボレスワフシチェスニャク様 机下」

書簡中の「木村愛助」は、ピウスツキがサハリンで冬場に開いた識字学校のアイヌ人生徒である。「私の母のジユウサンマは昭和十二年一月十八日に死去してあります。あなたの御手紙にはシンキンチョウと書いてありますが違ひます」という個所は重要である。従来の説ではチュフサンマは昭和 11(1936)年 1 月に死去したとされていたが、助造の言う昭和 12 年 1 月が正しいと考えるべきだろう。また能仲(のなか)文夫『北蝦夷秘聞 樺太アイヌの足跡』(北進堂書店、1933)のなかでチュフサンマは「シンキンチョウ」と呼ばれているが、助造がこれを明確に否定していることも注目すべきである。

一点気になるのは、封筒の裏面と書簡の末尾に「助造」ではなく「助蔵」と記されていることだ。おそらくこの書簡は他人の代筆によるもので、それ故の誤記かと思われる。この書簡の英語訳も「シュチェシニャク・コレクション」中に見つかった。

以上の調査旅行と新発見資料について詳しくは、拙稿「ブロニスワフ・ピウスツキ関係新発見資料について」を参照されたい⁴⁾。

注 ¹⁾<http://www.pauart.pl/app>

²⁾<http://www.ank.gov.pl/wystawy-i-galerie/japonskie-szlaki-bronislawa-pilsudskiego>

³⁾ 井上紘一、佐佐木信綱と W・シエロシエフスキの「愛国」の友情、POLE 90, 2017.1
<http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE90Sieroszewski.pdf>

⁴⁾ 埼玉大学紀要 教養学部 52-2, 2017.3
http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/download.php/KY-AA12017560-5202-09.pdf?file_id=36133

さわだ・かずひこ 大阪府生まれ、大阪外国語大学卒業、早稲田大学大学院修了、博士(文学)。埼玉大学大学院人文社会科学研究所教授。著書に『白系ロシア人と日本文化』『日露交流都市物語』(ともに成文社)など。



《新会員のひと言》

協会の活動を楽しみに

片倉 昭良

ポーランド文化協会という文字が目に入ったのは「まんまる新聞」という地域の新聞に載った「午後のポエジア」6 (2016.6)のお知らせでした。大変興味を覚え、何か私に大きな喜びを与えてくれるような出来事を感じたのでした。会場も北大のクラーク会館、是非一度行ってみたかったところの一つでした。



東京より厚別区もみじ台に転居して一年になりますが、札幌の町が良く分かりません。クラーク会館になかなか行き着けず、開始時間に間に合わず帰りかけた時にスタッフの方に「入ってください」と声をかけられ、本当にホッとしました。

今年で七十九歳になりました。元気に生きて行けば素晴らしい人生が待っているのですね。創意工夫された演目を見ること聞くこと、またポーランドの方々の音楽、紙芝居など新鮮で心に響きました。

朗読会の後お茶会に出て、ポーランドの方々、日本の方々同席で、ポーランド大使館のご好意により美味しいワイン、ビール、オードブル、ケーキ、餃子などを沢山いただき、本当に良かったです。

会長にお願いして新会員に入会できたことに心から喜んでおります。これからポーランドの人々と共に楽しく思い出を作って行き末長くこの協会が続いて行くことを心から願い皆様のご健康を祈って、またお会い出来ることを楽しみにしています。

(かたくら・あきよし)

ポーランド音楽に魅せられて

徳田 貴子



私とポーランドの出会いは月並みですが、ショパンのピアノ作品を通してでした。アメリカでの10年間のピアノ留學生活の中でケビン・ケナー (Kevin Kenner) 教授と出会い、ポーランド生活が長かった教授の教えを受け、博士論文でポーランドの女性作曲家グラジナ・バツェビチ (Grażyna Bacewicz, 1909-69) のピアノソナタ第1番、第2番を研究したことから、

ポーランドが身近に感じられるようになりました。

タトラ山脈のマズルカや、オベレク(ポーランド民族舞踊の中で最もテンポの速い踊り)のリズムはとても自然に感じられ、北海道の自然や生命力の強さに通じるように思えました。バツェビチは自身の作品についてあまり語らなかつたのですが、彼女の作品自体が当時の政治状況の中での人々の感情を代弁していると強く感じるようになりました。

どの作曲家の作品にもそれぞれの時代背景の影響が現れるのは当たり前ですが、社会主義リアリズムが強制された時代に、限られた表現手法の中で限界まで曲に創造性を込めた彼女の作品に強く魅せられ、これからもより深くポーランドの、特に20世紀のポーランド人作曲家の作品について勉強していきたいと考えております。

10年日本を離れている間にすっかり浦島太郎になってしまいましたが、北海道ポーランド文化協会を通じて、ポーランドという国、またその音楽、芸術への理解をより深め、自らの演奏活動にもつなげていけたらと考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

(とくだ・たかこ)

よろしくお祈いします

水上 淳也

ポーランドという国について、私の知識は全体の0.01%以下ではないかと思ます。

子供の頃から外国に魅かれ、今でも書店では必ず翻訳文庫の棚に向かいます。



1958年生まれで、シャーロックホームズやクリスティ、もっと小さい頃はディズニーの絵本を読み、隣町の浦河町の映画館にディズニーの映画を観に行っていました。母はおんぶして

私を連れて行ったそうです。音楽も好きで、中学の時、ビートルズは解散の頃でしたが、それ以来、聴くのはほとんど洋楽ばかりです。

西洋は私にとってロマンですが、海外旅行はグアム島に2回だけという寂しい経験しかありません。ロンドンやサンフランシスコ、ボストン、オランダなど、旅行ではなく一年、三年と暮らしてみたいという願いがありますが、ずっと仕事ばかりの生活で、海外どころか、旅行と言えば日帰りドライブ位です。

冒頭に戻って、ポーランドのことはほとんど何も知りません。ただ人類の歴史について、特に二十世紀の戦争等の非人間的事象の数々、市井の

人々のおびただしい苦難、弱い人々を守らない社会とその弱い人々の逞しさ豊かさ——歴史は苦手で秀吉や信長などにはあまり興味はないのですが——これらについては強く心を動かされるのです。

これから可能な限り協会のイベント等に参加させて頂き、書かれた物、写された物等と出会いたいと思っています。入会をお誘い頂いた松山様に感謝すると共に、会員の皆様のご健康をお祈りします。

(みずかみ・じゅんや)

感動的なものでした。とくに、サハリンに流刑されたピウスツキとアイヌの女性との結婚、彼が刑を終えてポーランドに帰る際の別れ、その悲しみにもかかわらず人間愛にみちた詩の朗読が印象的でした。



ワイドファンの一人でもあって、多くの作品を見してきました。先日は彼の遺作『残像』を鑑賞しました。党の政治体制が大学教授の職を奪い、芸術家の表現の自由を奪っていく様が活写されていました。

ポーランド文化協会の行事に参加させて頂いて、その国の文化を多様な視点から紹介されていることに感心しています。それが入会の直接的動機ですが、もう一つはポーランドでいわゆる「社会主義」体制が崩壊した、その数年後にワルシャワ、グダニスクなどの都市、さらにアウシュヴィッツ強制収容所などを見学して、歴史に翻弄されながらもたくましく生きる民衆の姿への想いとも重なって、今回入会の運びになりました。(さとう・せいいち)

協会の行事に参加して

佐藤 清一

「ポーランド映画祭 2017 in 札幌」でワイドの『灰とダイヤモンド』『夜の終りに』などを鑑賞し、久山宏一さんの解説もわかりやすく面白かったです。

その後、5月には詩劇『ピウスツキ』が江別で行われ、詩の朗読とピアノやアイヌ民族の楽器ムックリなどの演奏があり、内容的にもとても深みのある

♪〈後援〉第19代札幌コンサートホール専属オルガニスト

マルタン・グレゴリウス(ポーランド出身)デビューリサイタル

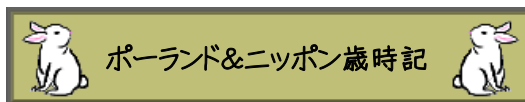
J.S.バッハ: パッサカリアとフーガ ハ短調 BWV582

M.グレゴリウス: 即興による舞踏組曲 ほか

会場: 札幌コンサートホール Kitara 大ホール

日時: 2017年10月7日(土) 14:00~15:30(13:30 開場)

入場料(全席指定): 一般 1,000円、各種割引 500円



湖畔で

ポズナンの中心からほんの少し離れた所に湖がある。夏にはそこで水着になって日焼けしたり、泳いだりする。ちょっと信じられない自然とのふれあいかもしれないが……。

leżak nad wodą

寝そべれば

lipcowy wietrzyk igra

入道雲と

z pierzastą chmurą

風遊ぶ

Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

stukot klawiszy

キーボード

na ekranie laptopa

パチパチ——画面に

już wschodzi słońce

陽が昇る

Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョートル・ヴジェチョノ

反逆の大地炎暑のポーランド
残像はマルクス、レーニン雷と電
サキノフは今何してる夏の雲

岩見沢市、霜田千代磨

今後の予定

《第 31 回定例総会&創立 30 周年祝賀会》、ニユーオータニン札幌(北 2 西 1)、2017 年 10 月 21 日(土)11:00~総会、12:00~祝賀会

《第 82 回例会》ポーランド映画ビデオ鑑賞会 2018:アンジェイ・ワイダ監督「コルチャック先生」お話:塚本智宏、2018 年 3 月ころ

《第 83 回例会》♪創立 30 周年記念コンサート、札幌コンサートホール Kitara 小ホール、2018 年 6 月 23 日(土)18:00 開演、出演予定:(お話)三浦洋(ピアノ)國谷聖香、田口綾子、坂田朋優、水田香、西村範子、川染雅嗣、徳田貴子、川本彰子、安藤むつみ、高島真知子&名取百合子、本田真紀子&横路朋子(声楽)松井亜樹(伴奏 高橋健一郎)、高橋可奈子

♪〈後援〉第 19 代札幌コンサートホール専属オルガニスト マルタン・グレゴリウス(ポーランド出身)デビューリサイタル、J.S.バッハ:パッサカリアとフーガ ハ短調 BWV582 / M.グレゴリウス:即興による舞踏組曲 ほか、札幌コンサートホール Kitara 大ホール、2017 年 10 月 7 日(土)14:00~15:30、入場料(全席指定):一般 1,000 円、U25 シート(1992 以降生まれ)・KitaraClub・PMF フレンズ 500 円

入会・退会(ご芳名、敬称略)

入会(2017.4~8)佐藤清一、菅原三栄子、徳田貴子、水上淳也
退会(2017.8)栗生沢猛夫、佐々木譲

新年度(2017.9~2018.8)会費納入のお願い

年会費(一般3千円、学生 1,500 円)と、維持会費(任意のご寄付1口千円)の納入をお願いします。



【郵便振替口座】記号 02740 5 番号 19735

【加入者名】 北海道ポーランド文化協会

- ※ 個別の納入依頼文書と振替用紙をお送りします。
- ※ 今年は特別に創立 30 周年記念のご寄付をお願いします。

『ポーレ』原稿募集

エッセイ(旅行記、新刊紹介、映画・演劇・演奏会の感想)、研究(歴史、社会、経済)、俳句・詩その他なんでも歓迎。事務局へご連絡ください。

住所変更・メールアドレスのご連絡を!

転居された方、イベント予定等のメールが届かない方は事務局(1頁目左上参照)へご連絡ください。

午後のポエジア 7〈詩劇〉ピウスツキの公演動画を YouTube に公開しました。

【YouTube 内 検索】詩劇・ピウスツキ Bronislaw Pilsudski
一度ご覧になって良ければ「いいね」を押してあげてください。

好意的な反響も聞こえてきます:[吟遊記](#) 2017.6.3、[ユサンマとトミ](#)(花崎皋平、小樽詩話会 606, 2017.8.5)

目 次

《第 31 回定例総会&創立 30 周年祝賀会》 1
 《第 80 回例会》午後のポエジア 7〈詩劇〉ピウスツキに参加して(菅原みえ子) 2
 〈詩劇〉ピウスツキへの補遺(尾形芳秀) 3
 ブロニスワフ・ピウスツキ資料を求めて(沢田和彦) 4
 《新会員のひと言》(片倉昭良、徳田貴子、水上淳也、佐藤清一) 6
 〈後援〉第 19 代札幌コンサートホール専属オルガニスト マルタン・グレゴリウス デビューリサイタル ... 7
 ポーランド&ニッポン歳時記(津田モニカ、ピョートル・ヴジェチョノ、霜田千代麿) 7
 (付録) 盲いたシンキンチョウの絶唱(長屋のり子) 一

盲いたシンキンチョウの絶唱

く チュフサンマの悲歌、そして哀歌、そして挽歌く

作 長屋 のり子



私は樺太アイヌの長老(エカシ)バフンケの姪シンキンチョウ。

一九一八年五月 パリ 雨の朝セーナ川のミラボー橋の下で

死んだ夫ピオトル・ピウスツキを恋うて 慕うて

恋うて 唄んで歌う 私の白鳥の歌、

あなた聴こえますか？ ピオトル、あなた聴こえていますか？

故国ポーランドの過酷な政治の歴史から押し出されて

あなたは流刑人としてこの地にやってきました。

この樺太に。私たちの島、私たちの恩寵の

長く先祖の守り続けた厳しい 愛しい この島に。

あなたは此処コルサコフにやってきました。

あなたは絶望し荒廃した他の流刑人の誰とも違った。

神から授かった生命を 生き切ろうという意思を

凜然と額に結んで輝きを放ち続けていた。亡国の不安の

その黒々とした暴力の記憶を背負いながら

あなたは違った。あなたは他の誰とも誰とも違った。

世界の不条理、歴史の苛酷さのなかで、

あなたの精神の発条(バネ)は頑丈だった。あなたはそのため

この島にやってきましたかのように 私たち先住民族に

臆せず親愛をこめて近づいた。あなたの心の底から

こみあげてくるような人懐っこい微笑みを 私は忘れない。

あなたは比類ない 慈しみをたたえて 私達の

村にやってきました。あなたは熱い情熱と深い畏敬を

こめて 私達のエカシに云った。

「私はあなた達を深く知りたい。そして深く学びたい」と。

ロシア学士院の依頼で、私達 民族のことを

学究的に知りたい、調べたいのだと申し入れた。

学究的なことは 私には 皆目分らないし、知らない。

私達、私達アイヌは 天の恵みを得て、ここを

原郷と信じて美しい原始の慣習を ここで生きつづけてきた。

神と共にある暮し レラ(風) アンチュプ(月)と共にある暮し

人間の営みへの深い肯定と悲哀との調和を豊かに生きて、

私達がどこからきたものであるか、そのルーツなど、

考えもしないことだった。私達には不必要だった。

樺太こそが私達の生命、私達の精神の美しい原郷。

私にはただ 日々エカシのもとに通いつづける

あなたの 不屈の精神が 眩しかった。

今も 私に 真実大事なのは、あなたにはじめて抱かれた日の

あの美しい湖のほとりの五月の 夕暮れのことだけだ。

五月だというのに小雪が 淡く舞っていた

あの丘のことが たまらなくなつた。

分厚い 雲の切れ目が遠く 薄赤く染まっていた。

広い湖の水は 澄み渡り、対岸の岩山は

雪に覆われて氷山のようにだった。

水際には 四十五億年前、地球が固まった当時

そのままのように 黒っぽい岩の断層面が 荒々しく

むきだしていた。 太古そのままに荒涼

と張りつめる 静寂の中に 二人立ちつくして、

そして あなたはあの日 私を不意に抱き寄せた。

あなたは激しく 優しく 私を抱いた。

あの夕暮れ、あなたは湖の波だった。

波のように 私は 抱かれた。私の魂の肌はまだ

しんしんと染み透ってくる 不思議な波。

それは霊気とさえ言つて いいもの。

この寒冷の島で 孜々営々、生命を繋ぎ

紡ぎつづけた 私たち先住民族への

畏敬を込めて 湖のほとりで 五月の夕暮れ

私を聖なるものを 抱くように、愛おしく狂おしく

そして大事に 本当に大事に抱いた。私の天に向かつて放つ声を

世界一 美しい音楽を湛える声と あなたは

囁いた。あの日、あなたがポーランド人の

強い魂の力の比類ない証として、私の

体内に注いだ熱いもの あれは一体

何だったのでしょうか。あの熱源は

年若い 盲いた今も 私の身体の奥でつんざく悲鳴のように疼きます。

あの湖のほとりの あの夕暮れを思うと

私の心は今日も、(あなたを永遠に

失つたと知らされた今日も……) 静かに

垂直に立つのです。あの夕暮れは

生命以前の 原始地球の風景の中にも

あつたもの、いいえ、宇宙全体でひそかに

波打ち続けていたもの、と今は思えます。

静かな激しい慈悲として 私の魂に

しみ入り、注がれたあなたの血は、やがて

一九〇三年、長男 愛しい助造の誕生に結びました。

一九〇五年まで続いた 私達のあまやかな琴瑟の営み。蜜月の日々。

サハリン東海岸、相浜の海辺、相川と呼ばれた

小川のほとり。アイハマ アイカワ、

そこはその地名さえ愛アイに縁どられた場所。

今も見えない眼から 涙がにじむほどに

懐かしい 懐かしい感覚が 身の内を走ります。

日露戦争のあと、あなたが、独立戦争の絶好の機と

勇躍 祖国を奪い返すために

鳥が翔つように ポーランドに帰国して、

私はその秋、一人寂しく あなたの面影を深く映す

娘キヨを生んだのです。

それからいくつもの春が巡って、駒鳥は

群れなして、私の頭上を 飛び交い囀ったけれど

あなたは帰って来なかつた。

祖国を奪い返してから、祖国の独立を

果たしてから「必ず迎えに来る」という

ピオトル、あなたの真摯な言葉を信じて私は待った。

あなたの残した識字学校の教師を勤めながら、私は待つて待つて

待ちつづけた。ひたすら ひたすら待ちつづけた。

サハリン、アイハマ アイカワのほとりで。

湖がさざ波たてるたび 小川がサラサラ鳴るたび 春の小鳥達が

鳴き交わすたび、私の心はムックリの音のように

トンコリの音のように さざめいた。

一九一八年、一二三年ぶりに ポーランドが

独立を果たしたと、樺太の白樺を吹き抜ける風が 私に伝えたけれど

それで私の血は激しく躍ったけれど あなたは帰って来なかつた。

ああ、その年に あなたが、パリで、ミラボー橋の下で

不審死したと 知らされたのは

一九三四年、今日の正午のことです。

あなたの弟、ポーランド革命の指揮者ユゼフ元帥の使者から

それは峻厳に 丁重にもたらされました。

これまで屹立しつづけた対岸の氷山が一瞬にして砕けおちました。

私は泣いて泣いて溺れ死にでもするように泣いて……。

与謝野晶子の詩のように「旅順の

城は滅ぶとも 滅びずとも 何ごとぞ……」です。

女に革命はいらないのです。

大義など、いらぬのです。

夕暮れの 湖の 静かな波音だけが、

今も私の耳底で響きます。

交わした睦ごと、あなたの振動、私の振動。

私は二十九年あなたに焦がれて 焦がれて 泣きつづけて

今はもう盲(メシイ)となりました。

盲いた私には、今、宇宙から降るこの世のものならぬ、

澄んだ音が、本当に 聞こえ続けるのです。

記憶の破裂音が胸劈(つんざ)いて 私はやっと気づくのです。

十六年前、あなたがパリで不慮の死を遂げた日、

わたしは夥しい白鳥が まるで天地の運行のように

悠久に ひたすらに サハリンの

夜空を流れるのを 確かに見ていたのです。

一羽の鳳(オオトリ)の鋭く 切なく 親しく、懐かしく

鳴くのを聞いているのです。幻聴ではなく

あれは、まさしくまさしくあなたでした。ピオトル、あなたでした。

命賭した 革命を終えて、パリから

あなたの魂は まっすぐに 一目散に

私と、あなたの俊秀の潔い血を継ぐ あなたの子供達

愛しい愛しい助造とキヨの 待つ 樺太に

帰ってきてくれたのです、アイハマに、アイカワに。愛の巣に。

あなた聴こえますか？

あなた聴こえていますか？

もうすぐ もうすぐ、シンキンチョウは、ピオトル

あなたのもとに赴きます。

私も亦、白い鳳となつて、ピオトル あなたの今過(いま)ごす場所

目指して 飛び翔ちます。

あなたが愛でて やまなかつた アイヌの

美しい旋律で、トンコリのように、ムックリのように

優美にクオオー クオオと 鳴きながら。空に舞います。

五月の天国(ライソ)の小鳥たちの囀る岸辺で

もう一度 あなたに抱かれるために。

あなた 聴こえますか？

樺太アイヌ シンキンチョウの音が、

あなた 聴こえていますか？

あなた、あなた、聴こえていますね。

* 夫の死が告げられた、その三年後の一九三七年、ポーランドの英雄、ブロニスワフ・ピオトル・ピウスツキにその一生を、全生涯を捧げて、樺太アイヌ シンキンチョウ没。

(参考) 花崎皋平、ユサンマとトシ、小樽詩話会 606、2017.8.5



(上)「アイヌの王」ブロニスワフ・ピウスツキ、アントナス・ヴァルナス画、1912 (ザコパネ・タトラ博物館所蔵) (中) 妻チュフサンマ (下) 長男木村助造 (撮影 A.Janta-Polczyński, 樺太・白浜/白浦, 4-12/01/1934, The collected works of Bronisław Piłsudski. Vol.3. Materials for the study of the Ainu language and folklore 2. Ed. by A.F.Majewicz. 1998. Plate CLXXXI. p.203)